

監修委員 井上靖 石森延男 更科源蔵

編集委員 加藤多一 木原直彦 西田良子 和田義雄

第九卷

北海道児童文学全集





北海道児童文学全集

第九卷

立風書房



北海道児童文学全集 第9巻

21cm



昭和五十九年二月一日初版第一刷発行

著者代表―安藤美紀夫

発行者―下野博

発行所―株式会社立風書房 東京都品川区東五反田三―六―一八

電話東京四四七―一一九一 振替東京五―七四四九三

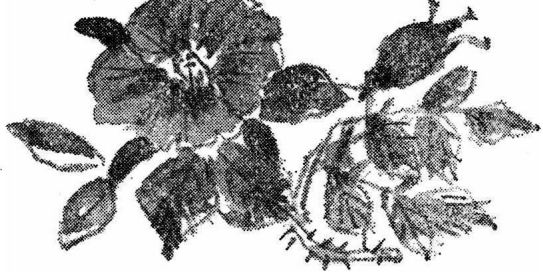
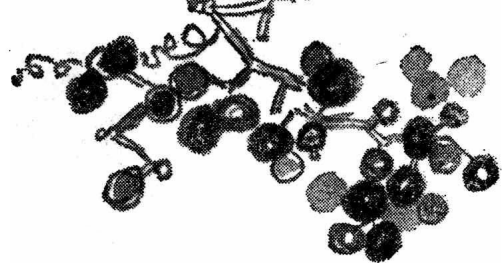
本文―信毎書籍印刷株式会社

製本所―株式会社難波製本

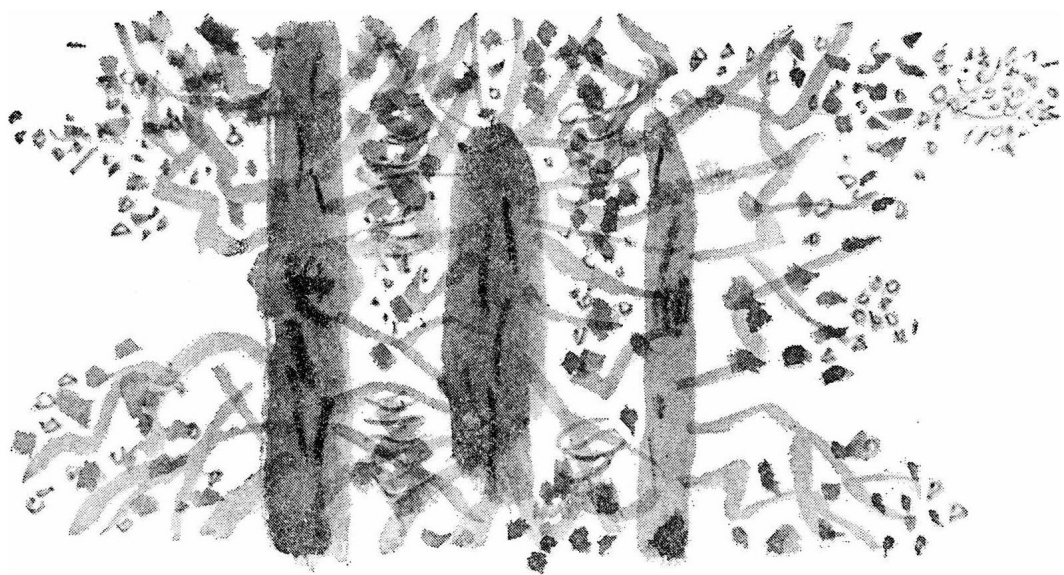
表紙・箱・絵印刷―株式会社廣濟堂

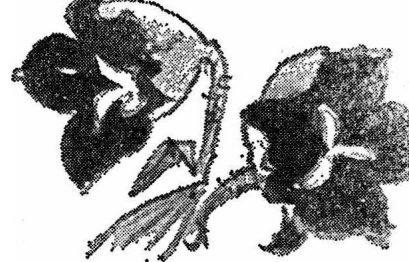
定価一八〇〇円

8393―50179―8909



北海道児童文学全集
第九卷 目次





白^{しろ}いりす

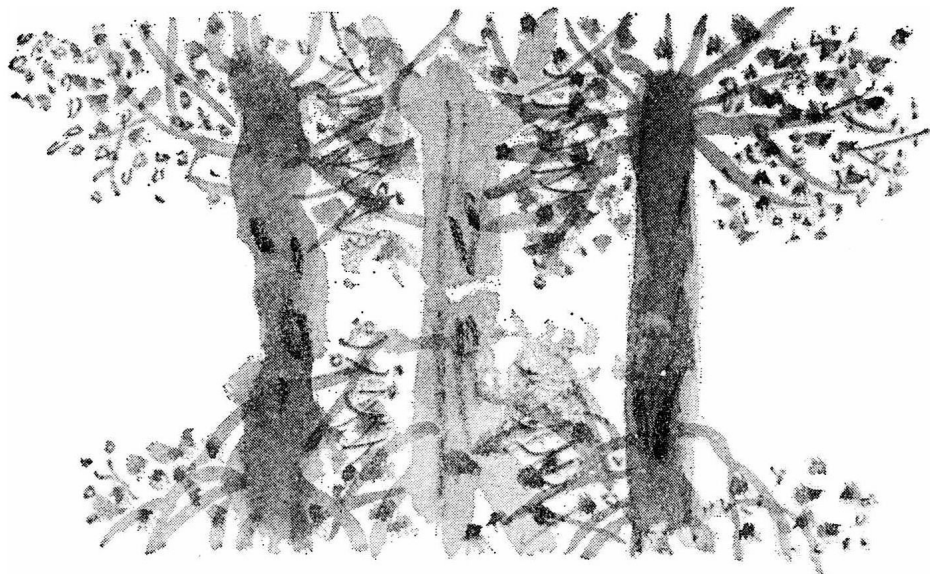
シゲちゃんの目は千里^{せんり}眼^{がん}

解説^{かいせつ}

安藤^{あんどう}美紀^{みき}夫^お 3

滋野^{しげの} 透子^{すみこ} 139

西田^{にしだ} 良子^{よしこ} 331





白^{しろ}
いりす

安藤^{あんどう}美紀^{みき}夫^お

はじめに

みなさん。みなさんがたは、りすのことは、よく知っていますね。

北海道の東や北の森には、そのりすが、たくさんすんでいます。えぞりすとよばれる、しっぽのふさふさした、くり色のかわいいりすです。そのくり色のりすのあいだに、もし、まっ白なりすが一びき生まれたとしたら、どうでしょう。ぼくたちにんげんの祖先は、そういう白いりすを、神のお使いと考えたり、その美しさに、おもわず目を見はったりしました。けれども、白いりすは、そんなにしあわせなりすでしょうか。いいえ、まるではんたいです。それは、その美しさのために、みんなからなかまはずれにされ、おそろしい森のてきたちから、たえずつけねられる、不幸なりすなのです。

この物語の主人公であるユツクも、そうした不幸なりすの一びきです。みんなと毛色がちがうという、ただそれだけの理由で、親子や兄弟りすからさえも見はなされたユツクは、すみなれた森をでて、ひとりで生きていかなければなりません。

けれども、みなさん。この「白いりす」の物語は、けっして、ふかい森の中だけにおこる物語ではありません。ようく、あたりを見まわしてごらんなさい。ぼくたちにんげんのあいだにも、これと同じようなことが、たえずおこっていることに、きつと気がつくはずですよ。

どうか、みなさん。そのつもりで、この物語を、さいごまで読んでください。

雪^{ゆき}どけの川

みかん色をした、大きな太陽が、おくふかい森のむこうに、しずかにのぼりはじめるじこくです。

きらきら光るかた雪^{ゆき}の上を、一びきの子りすが、用心ぶかくあたりに目をくぼりながら、すすんでいきましました。えぞりすたちにとっては、生まれたときからのてきである、すばしこい、いたちやてんが、どこからすぎをうかがっているか、わからないからです。

子りすは、木の実^みをさがしに、すからでてきた、えぞまつ^{えぞまつ}の森のユックでした。ユックは歩^あきながら、ときどき立ちどまって、できるだけ雪^{ゆき}のすくない、くるみや、ならの木をえらんで、ねもとのようすをしらべてみます。そういう木は、去年^{きょねん}の秋^{あき}に、きつと、どっさり木の実^みをふらして、それが、雪^{ゆき}の下にうもれているにちがいないからです。

けれども、ユックがすんでいる、えぞまつ^{えぞまつ}の森の近く^{ちかく}には、好物^{こうぶつ}の木の実^みがうもれていそうな木は、なかなか見つかりませんでした。そのうえ、たまにあったと思^{おも}っても、いつでも木の実^みにありつけないとは、かぎりません。そんな木は、きつと、もう、だれかがさきに、ねもとの近く^{ちかく}に小さな雪^{ゆき}のトンネルをほって、ちゃんと木の実^みをあさったあとなのです。

「ちえつ、この木も、だめか。」

ユックは、ちょっとがっかりしました。でも、せっかくここまでできたのに、手ぶらでかえるなんて、兄弟^{きょうだい}りすのてまえ、とてもはすかしくて、できないことです。

「ようし、もうちょっとさきまでいってやれ。」

そう決心すると、ユックは、また氣をとりなおして、雪の森をすんでいきました。

四月の森は、いたるところ、まだ雪におおわれたままでしたが、さむさは、もうま冬ほどではありませんでした。北国の森にも、春がはじまろうとしているのです。

去年生まれたばかりのユックには、春がどんなものか、よくわかりませんでした。

でも、おとなのりすたちが、みんな、

「春になったら、春になったら……。」

と、声をそろえていうところを見ると、きっと、よっぽどいいものにちがいありません。

それに、そういわれてみると、このごろ、ユックのからだの中にも、なんだか、どんどん新しい力がわいてくるような気がします。

「春になったら、きっと、なにかすばらしいことがおこるんだ。」

ユックは、むねをふくらませて、春のことを考えながら、いつのまにか、森のまん中を流れる、谷川の岸まできていました。

このまえ、おかあさんりすのフーコにつれられて、みんなといっしょにきたときには、まだすっかりこおりがはりつめていました。ところが、いまはちがいます。こおりは、岸の近くに、ほんのすこしあるだけで、まん中のほうは、雪どけ水が、ゴーゴー音をたてて、流れていました。

「これも、春のせいなんだな、きっと。」

ユックは、しばらくのあいだ、目をまるくして、水かさのふえた、きゆうな流れを見ていました。すると、そのとき、ふいに、ユックの頭の上で、声がありました。

「おや、おや。このちびりすめ。はねもないのに、川をわたる氣でいるのかな。」

ちびりすなんていわれたものですから、ユックがちょっとむっとして、上を見ると、一わのかわがらすがきしべの、あかだもの木のえだにとまっています。このまえきたときに、小さなしつぽをびくびくさせながらこおりのあなから、川の中のさかなをねらっていたやつにちがいありません。

「ちびりすとは、なんだ。」

ユックは、しつぽをびんと立てて、どなりました。けれども、ユックのしつぽは、おとうさんりすのオークのように、りつぽなものではありませんので、あまりききめはなさそうでした。

あんのじょう、かわがらすは、それを見ると、かん高い声でわらいだしました。

「なにが、おかしいんだ。」

「いや、しつれい、しつれい。ぼうやのしつぽが、あんまり、りつぽなものだからね。」

ユックは、ばかにされたのが、よくわかりました。それで、なんとかいいかえしてやろうと、ひげをびくびくふるわせました。けれども、かわがらすは、そんなことにはおかまいなく、こんどは、大まじめな顔になって、いいました。

「ぼうや、ぼうや。ぼうやは、まだ子りすだろう。へんだな……。」

「なにがへんだ。」

「子りすのくせに、もう、しらががはえているじゃないか。」

それをきくと、ユックは、もうがまんができないというように、おもわず、びくんととびあがりました。

「ぼくのからだに、しらががはえてるって。……うそつくな。」

「うそじゃないさ。うそだとおもうなら、やませみのおかみさんにでも、聞いてみるがいいさ。」

「うそだ。」

「まあ、いいや、そんなことは。もうすこしたてば、しぜんにわかるこった。それより、ぼうや、いっとくがな。」

はねもないのに、春はるの川をわたろうなんてことだけは、考かんえないほうがいいぜ。」

かわがらすは、いいたいほうだいのことをいってしまうと、さっさとはねをひるがえして、さもとくいそうに、川面かわもをすべっていききました。

「なんだい、あいつ。はねがあると思おもって、いばらない。ぼくだって、こんな川くらい、わたろうと思おもえば、わたれるんだぞ。」

ほんとうに、えぞりすは水泳すいえいがじょうずな動物どうぶつでした。ただ、ユックはまだ子すりなので、こんなに流れながのはやい川は、やっぱり、どうもおそろしいのです。

ユックは、しばらくのあいだ、とびさっていった、かわがらすのうしろすがたと、にごった水みづの流れながれを、くやしそうにながめていました。

ユックの目のまえを、ときどき、大きなこおりのかたまりや、芽めのでかかったねこやなぎが、ねこそぎおし流ながされていきました。くさってたおれたのか、つたのからまった大きな木が、きゅうくつそうに、あちこちにぶつかりながら、流ながれていくのも見えました。

ちよつとのあいだ、そんなながめに見とれているうちに、ユックは、さっき、かわがらすにからかわれたくやしさを、すっかりわすれてしまいました。

「川上の森も、春はるなんだな。そうだ、きつと春はるなんだ。」

ユックは、おもわず、大きな声こゑをだして、ひとりごとをいっていました。

えぞりすの一家^か

えぞりすのすは、たいてい、えぞまつやとどまつのような、年じゆう、みどりの葉^はをつけた、高い針葉樹^{しんようじゆ}のえだにつくられています。

空のてきからも、りくのてきからも、それから、しぜんのさむさからも、しっかりと守^{まも}られた、そのすの中でユックは、いままで、兄弟^{きょうだい}りすのモックやバックと、ふざけたり、けんかをしたりしながら、たのしい毎日^{まいにち}をおくってきました。それは、ほんとうに、なんの気がかりも心配^{しんぱい}もない、たのしい毎日^{まいにち}でした。

ところが、ある日のこと、ユックがもうすっかりわすれていた、あのいやな話^{はなし}を、どうしても思^{おも}いださずにはいられないようなことがおこったのです。あのいやな話^{はなし}というのは、もちろん、かわがらすがいった、しらがのことです。

ユックは、その日、ほんのちょっとしたことから、弟^{おとうと}りすのおしゃべりバックと、大げんかをしてしまいました。けんかの原因^{げんいん}は、ほんとにくだらないうことでした。そして、けんかの結果^{けつか}は、いつものとおり、ユックの勝^かちでした。だって、ユックは、いざとなると、とてもゆうかなりすでしたが、バックは、口だけはとてもたっしゃなくせに、ひどくおくびようなりすでしたから。

ところが、けんかは、それだけでは、終^おわらなかつたのです。ユックの手からのがれたバックは、すからとびだすと、くやしきまぎれに、こんなことをいったのです。

「おぼえてろ、ユック。おまえの毛^けが白いことを、森のりすみんなに、知^しらせてやるからな。へんなんだ、へん

なんだ、ユックの毛は白いんだ。ふつうのりすとはちがうんだ。」

「なんだとう、バック。」

ユックは、よつぽど、おもいきり、バックの顔へかみついて、だいじな前歯を二、三本へしおってやろうかと思つたほどでした。

けれども、それよりさきに、おかあさんりすのフーコが、ぱつと、すをとびだすと、近くの木のえだで、あくたいをついていたバックをつかまえて、むりやり、すの中へつれもしました。

「よけいなことをいうんじゃないよ、バック。おまえはすこしおしゃべりがすぎます。ちつとは口をつつしまなくちゃ。」

「だって、白いんだよ、白いんだよ。ほんとだよ、おかあさん。」

「わかつてます。おかあさんだって、ユックの毛が、ふつうのりすとちがうことくらい、だいぶまえから、わかつてました。でも……。」

と、おかあさんりすのフーコは、ちょっと悲しそうに、口ごもりました。

「ユックの毛だって、これから、どうかわるかわからないし……。ねえ、おとうさん。おとうさんは、どうお考えになつて？」

「そうさなあ。わしの目に、もし、くるいがないとすれば……。」と、おとうさんりすのオークは、しばらく考えてから、ふさふさしたしつぽをびんとはねあげて、おもおもしろい声でいいました。

「これから、白くなるようでもあり、白くならないようでもある。」

オークは、この森の、りす組合の組合長をするくらいいボスでしたから、いつも、こんなふうに、わかつたような、わからないような、あいまいなことしかいわないのです。

けれども、それを聞くと、ユックは、ちよつと安心しました。

「それみる、バック。はつきりわかりもしないくせに、いいかげんなことばかりいうと、ほんとに、前歯の二、三本へしおってやるからな。」

ちょうど、そのとき、すの下のほうから、木のみきをのぼってくる、かすかなもの音が聞こえて、みんなは、いっせいに、ぴんと聞き耳をたてました。しかし、それは、聞きなれたバックの足音でした。ようりょうがよくて、ものおぼえがいいので、みんなから「優等生」というあだ名をもらっているバックが、小さなならの実を持って帰ってきたのです。ほんとうに、バックは、ユックやバックとはちがって、木の実を見つけるのが、とてもじょうずなりすでした。それも、ユックのように、あちこち、むやみに歩きまわったり、つめたいのをがまんして、新しい雪をかきわけたりしなくても、ちゃんと木の実を見つけてくるのです。

そのひみつを、バックは、だれにも話しませんでした。でも、それは、かんたんなことでした。だれか、ほかのりすがほった雪のトンネルを、こんきよくさがせば、とりのこしの木の実が、一つや二つは、かならず見つかるものなのです。

でも、だれかが、木の実を見つけてくると、すの中では、かならず大そうどうがおこります。いつもは、すのすみのところで、まるくなつてねているぐうたらモックが、かならずおきてくるからです。ぐうたらモックは、兄弟りすの中では、いちばんはたらかないくせに、いちばんふとっていて、灰色がかった茶かつ色の毛なみも、いちばん、つやつやしていました。

「バック。半分、よこせよ。」

ぐうたらモックは、あたりまえのこのようにいいました。

「だめだよ、モックは。」

「いいから、よこせ。こんど、おれがとってきたら、きつと、おまえにやるからな。こんな、ちつぽけな、ならの実じゃなくて、くるみだぞ。」

「そんなうそいったって、だまされないよ。」

「いいから、半分よこせ。」

「いやだ。」

「よこせ。」

「いやだ。」

さっそく、とつくみあいのけんかです。地上十メートルばかりのところに、かれえだや、草のつるを集めて作った、小さなすは、いまにも落ちそうになって、ゆらゆらゆれました。

「およしってば、モック。これ、ピック。やめなさい。」

おかあさんりすのフーコが、かなぎり声をあげましたが、それくらいのことでおさまるはずはありません。すると、そのとき、おとうさんりすのオークが、また、ゆつくりとしつぽをあげました。

「うるさい。」

その一声で、ぐうたらモックは、くるくると、しつぽをまいて、また、もとのようにまるくなって、ねてしまいました。

「モックは、ずるいから、いやだ。ユック、いつしよにたべないか。バックもこいよ。」

優等生のピックは、そういうながら、じょうぶな歯で、カリカリと、ならの実をかみくきました。

おしやべりバックは、あいかわらず、なんだか、べちゃくちやしゃべりながら、さっそく、ピックがくれたならの実の小さなかけらをかじりだしました。

けれども、ユックは、さつきから、まだ、やつぱり、からだの毛のことが心配でしたので、せっかくの木の実も、あまりたべたい気がおこりませんでした。

「ねえ、ピック。ちょっと聞くけど、ぼくのからだ、白っぽく見えるかい。」

「白っぽく見えるかいつて、白いよ、白いよ。ほんとに白いんだ、ねえ、ビック。」

おしゃべりパックが、待つてましたとばかり、横から、鼻をつきだしました。

「だまつてろ、おまえは。でないと、ほんとに、前歯を二、三本……。」

ユックが、そこまですったときには、もう、おしゃべりパックのすがたは、すの中には見えませんでした。前歯をへしおられてはたいへんと、すばやく、すの外の小えだへとびうつっていたのです。

「どうしたのさ、いったい。」

そのありさまを見て、優等生のビックは、ふしぎそうにたずねました。

ユックは、いままでのいきさつを、すっかりビックに話しました。ビックは、とても子りすとは思えない、おちついたいで、ゆっくり、うなずきながら、ユックの話を聞いていました。それから、やがて、やっぱり、ゆっくりとおちついたくちようでいいました。

「そうだな。そういわれれば、ちょっと白いかな。でも、なんでもないよ、きつと。気のせいかもしれないし、それに、たとえ、ちょっとくらい白くたつて、二、三日たつたら、なおつちまうよ、それくらい。」

ビックのことは、こういうときには、ほんとうに、たよりになります。なにしろ、ビックは、「優等生」といわれるくらいの子りすです。モックやパックみたいに、口からでまかせをいう心配はないからです。

ユックは、ひげをびくびくふるわせると、やっと安心したように、ビックのくれた、ならの実のかけらをいきおいよく、ガリガリツとかじりました。

森の春^{はる}

森には、日一日と、春^{はる}が近づいていました。川岸^{かわぎし}のねこやなぎが、どんどん小さな芽^めをふきだし、その横^{よこ}の、背^せのひくいすもの木も、まっ白な花をさかせる用意^{ようい}ができたようでした。ユックには、はじめての春^{はる}が、もうそこまできているのが、よくわかりました。

そんなある日、冬^{ふゆ}のあいだ、どこへいったのか、さっぱりすがたの見えなかった、くろつぐみの一家^{いけ}が、森へ帰^{かえ}ってきたのをきっかけに、こまどりの夫婦^{ふうふ}も、子どもたちをつれて帰^{かえ}ってきて、森は、にわかに、にぎやかになりました。

くろつぐみは、キュル、キュル、キュルと、とてもよくとおる声^{こゑ}で、みんなに、里^{さと}のにんげんたちも、そろそろ仕事^{しごと}をはじめるところだと、旅^{たび}のとちゅうで見てきたことを、とくいそうに話^{はな}しはじめました。

「にんげんって、なにさ。ぼくたちとおなじような動物^{どうぶつ}かい。それとも、おじさんたちみたいに、はねがあるの？」

勉強家^{べんきょうか}のビツクは、さっそく質問^{しつもん}をはじめました。

「そのどちらでもないな。四本足は四本足だがな、後足^{あとあし}で立ちあがってな、前足^{まえあし}を使って、とてもきように、なんでもやれる動物^{どうぶつ}だ。」

「それなら、ぼくたちみたいに、前足^{まえあし}で、うまく木^きの実^みが持てるんだ。」

「いやいや、木^きの実^みどころか、なんでも持^もてる。その前足^{まえあし}で、木^きを切りたおすこともできれば、火^かをつけること